

新潟大学の魅力と現在を発信

新潟大学季刊広報誌

花



NIIGATA UNIVERSITY
MAGAZINE

— R I K K A —

2014.AUTUMN [No.10]

 新潟大学

授業紹介-教育の現場-

学生の課外活動&サークル紹介

Enjoy! 学生ライフ

シリーズ・対談

注目される研究報告

Campus Information

特集

「地域貢献・社会連携」

—地域の発展に資する新潟大学の取り組み—



「地域貢献・社会連携」

地域の発展に資する新潟大学の取り組み
 新潟大学は、「地域貢献・社会連携」という命題に、どう
 向かおうとしているのか。門脇副学長にお聞きしました。

門脇基二 副学長

1986年、東京大学にて農学博士取得。専門は栄養生化学。食品関連分野の技術革新と社会貢献にも力を注ぎ、新潟大学自然科学系附置 地域連携フードサイエンスセンター長などを歴任。2014年より副学長(社会連携・情報化推進担当)。



新潟という地域に、より積極的に
 貢献していくのは重要なこと

CONTENTS

03 特集

「地域貢献・社会連携」

—地域の発展に資する新潟大学の取り組み—

08 授業紹介 - 教育の現場 -

09 Enjoy! 学生ライフ

10 シリーズ・対談

11 注目される研究報告

12 Campus Information

Cover Photo

今回の表紙モデルは、経済学部・長尾ゼミの「小千谷ブランディングプロジェクト」に携わる学生5人(左から安藤さん、荒井さん、小川さん、長谷川さん、神田さん。全員3年生)。着物、服、食など、それぞれが自分の関わっている対象をイメージさせるモノを持ってニコリ。充実した活動ぶりを思わせませう。



地域に貢献する研究は、
 今後も一層強めていく
 必要がある

大学の基本的なミッション(使命)には、「教育」と「研究」、さらに「地域貢献・社会連携」があります。その意味では、若い学生を社会で活躍できる存在に育てあげる、それ自体が社会貢献につながるわけですが、同時に、学生たちが住むこの新潟という地域に対し、より積極的に向き合って貢献していくのも重要なことだと考えています。特に新潟大学は、あらゆる分野の専門学部に有する総合大学なので、さまざまな面でそれが可能なはずだし、実際、各学部ごとに多くの先生方がいろいろな形で地域に貢献する研究をしてきた——それは、今まではもちろん、現在もそうですし、今後も一層強めていく部分が必要であります。例えば、新潟は農業県ですので、自然環境と農業の面での貢献は地域の期待が大きいところでしょう。医療の面でも、さらに充実した医療体制が各地から期待されているでしょうから、そのために医学部から優秀な医師を社会に出していくことも新潟大学の非常に重要な役割だと捉えています。また、「災害食」への取り組みもそのひとつです。新潟は期せずして災害の多い地域になってい

『六花』とは…
 本誌のタイトルでもある『六花』とは、本学の校章のモチーフである「雪の結晶」を表す言葉。本学の校章は、シンボルマークであった学生章をモチーフに本学名誉教授 小磯 稔氏がデザイン化したものです。

題字
 野中浩俊(のなか ひろとし)氏
 新潟大学名誉教授(教育人間科学部)。専門は、書道、富岡鉄斎研究。現在は、岐阜女子大学 教授

るわけですが、実際に被災された方々にお聞きすると、やはり災害時に一番不足するものとして「食」を挙げられていて…、そういう災害時に役立つ食料というものを、我々フードサイエンスセンターですと研究・開発し、実際に「災害食」として提案してきました。それが今、災害関係の省庁や関係者の注目を集め、活動が評価されるようになってきました。まさに新潟発の形でそのノウハウを外に向け発信している——。これも社会連携の一例ですね。

地域に住む人と一緒にモノを作り上げていくケースもたくさんある

そういう活動をしていく中で、地域の企業やそこに住む人たちと一緒にモノを作り上げていくケースもたくさん出てきます。その輪の中に学生たちが入るとしても、社会に出て、いろんな人がどういふモノの見方をしているのか、またその人たちに自分の考えをいかに伝えられるかを肌で感じる良い機会になっていますね。そこでは、そもそも初めて会う方に積極的に話しかけるってところから始めなきゃいけないです。特に新潟の学生は、基本的ににおとなしいので、彼らにとってドキドキする体験になっているんじゃないですか(笑)? でも、

経済学部の長尾先生のゼミのように、毎年毎年、小千谷へ学生たちを連れていき、街の人の話を聞く中で小千谷という街の活性化を自分たちの課題として捉え(その回答を)見つけさせる活動をやっている、その地域とより濃い関係を構築できていくわけですよ。若い学生が小千谷の地域に出かけていき、年配の方々と街の活性化について議論したり、イベントなど実際に行動も起こしていく——そういう関係がまた、地域が元気になる術のひとつになっているんじゃないかな。

学生たちのエネルギーをいかに花開かせていくか。それもすごく大事なことです

あと、経済学部などでは、ベンチャー的な形で、産業の面から地域を活性化する動きも出てきているんですよ。学生が自発的に、そういうアントレプレナー(起業家)的な動きを考えてみないかと——それに、経済学部だけでなく、理工系の学生たちがたくさん興味を持っていたりしている。そういうところを見ると、実は我々教員が考えている以上に、大学内にエネルギーが溜まっていることに気づくし、そういった若い学生たちのエネルギーをいかに花開かせていくか、どう実現させてあげられるか、それがすごく大事なことだと思いますね。

NEWS! 公式Facebookページを開設しました。

新潟大学 Facebook

ホームページで発信するニュースのほか、四季折々のキャンパス内の風景など新潟大学をもっと身近に感じていただけるコンテンツを発信していきます。多くの皆さまの「いいね!」をよろしくお願いいたします。

本学ホームページからアクセスしてください。

2 野生動物による農作物被害や人間との軋轢を解決するために

自然科学系の取り組み

“野生動物の管理・保全”



現地調査に加え、GISやリモートセンシング、統計モデルといった技術を活用しデータを分析



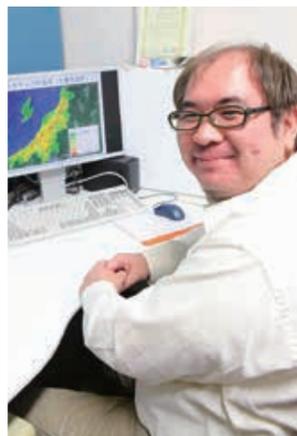
右)麻酔で眠ったツキノワグマ。GPS首輪を装着した後、自然に帰して行動を観測 左)新潟田地区では約15群れのニホンザルを10年前からモニタリング



被害が起きやすい地域に何回も足を運び、住民の方たちと話し合って解決方法を探す

望月翔太 助教

新潟大学 大学院自然科学研究科 助教。専門は、景観生態学および野生動物管理学。



生態系における野生動物の重要性や、自然と共存する生活や農業を、地域の方に分かりやすく伝えるため紙芝居を制作

すよ。彼らが木の实を食べて排泄することにより、種がまかれ、豊かな森ができていく。その流れを断つことは賢明じゃない。そこを理解してもらおう。ではどうしたらサルが被害を減らしていけるのか、その折り返しをつけていくための道筋を立て、科学的なデータを示しながら対策すればうまい。これぞ、まさに地域住民との連携が我々の役目だと思っています。」

地域住民と合意形成により野生動物を管理、生態を保全
人間と野生動物の共生関係を築くために
「僕の専門分野は野生動物管理学。人と野生動物の関係をいかにうまく保つことができるのか、ということですね。そう語る望月助教は、もともと新潟大学出身。大学4年時に卒業論文の準備をする中で、当時師事していた先生とこの動物管理の研究をやろうと決めたのだとか。「新潟県ではニホンザルやツキノワグマ―彼らが山から里に下りてきて農作物を食べてしまうんです。野生のサルは県内の至る所に生息している、彼らがどんどん悪さをしてし

まう...その被害金額はかなりの規模に及んでいるという。そこを何とか改善する方法を見つけるのは、当時、大学内でまだ誰もそこまでかかわっていないことだと思ひ、腰を据えて研究していこうと思つたんです。」
地域住民との対話や合意形成が何より重要
とは言え、容易に管理できないからこそ野生動物であり、それを管理・保全しようという試みなのだから、いろいろ苦労も多いことだろう。望月助教は言う。「動物を管理するというのは、いわゆる

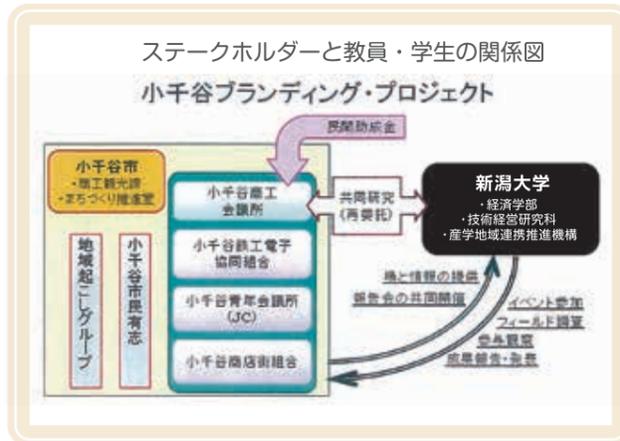
机上の研究だけではできない部分があつて、農作物の被害を軽減させるためには、やはり地元住民の方―その地域で実際に農業に従事している方が農作物を守っていく必要があるのだ。「じゃあ、どうやってそれを守っていくべきなのか?」という指導が必要になつたりするわけです。そこで一番大切なのが、その地域住民の方との合意形成なんです。動物を管理するってことは決して綺麗ごとだけでは済まされません。その地域に行く、最初はほぼ、(住民の方は)サルを絶滅させてくれっていう話になるんです。でも、ニホンザルにしろクマにしろ、絶滅させるのはよくない。彼らは生態系の中で豊かな森を作るうえで非常に重要な役割を担っているんで

「このプロジェクトを通じて、地域の発展を課題に考えていた同市と、新潟大学をはじめとした県内技術系大学等が連携。2007年より開催してきた「小千谷産学交流研究会」が土台となり、2012年度から「小千谷ブランディング・プロジェクト」が発足した。地域そのものをブランディングするという観点

1 地域おこしプロジェクトに学生が参加し共に取り組む

人文社会・教育科学系の取り組み

“小千谷ブランディング・プロジェクト”



とまつ衣裳店とのコラボレーション。完成したものを着た地域活性化モデルの今井美穂さんと

栽培体験などを企画し、交流の場を作っています。先人たちが培ってきた地域の資産を引き継ぎながら、自分たちらしい地域おこしを創出していければと思っています。」
これらの実践的な取り組みは学生たちにとって理論と実践が結びつく場にもなる。「問題解決の力や交渉力を身に付けさせることが重要。様々なステークホルダーとの関わりは、学生たちの学習意欲に大きく影響を与えてくれるはずなんです。ゆくゆくは大学の総合大学としてのメリットを生かし、学部を越えた連携により様々な視点から地域と関わり、問題解決に取り組んでいければと思います。」



長尾雅信 准教授
新潟大学 大学院技術経営研究科 准教授。地域ブランド・マネジメント、関係性マーケティングについて研究。

STUDENTS VOICE
Q.小千谷ブランディング・プロジェクトについての感想は?
この取り組みは企業の方と協力しなければ、自分たちの目指すものを完成できないので、企業のメリットも考えながら、活動を行っている
このプロジェクトから卒業しても地域の人との絆を大切にしたい

住民と連携した地域ブランディング
小千谷市は2004年の新潟県中越地震、また2007年の新潟県中越沖地震にて、甚大な被害をこうむった。
こうした経験を経て、新産業の創出による地域の発展を課題に考えていた同市と、新潟大学をはじめとした県内技術系大学等が連携。2007年より開催してきた「小千谷産学交流研究会」が土台となり、2012年度から「小千谷ブランディング・プロジェクト」が発足した。地域そのものをブランディングするという観点

新しい地域の魅力を創出する
から、産学地域連携推進機構の教職員がコーディネーターとなり、経済学部経営学科長尾ゼミの2・3年生が演習課題として取り組むものだ。
4グループに分かれて地域コンセプトを見出す
その本学担当教員が長尾准教授。「初年度は、小千谷といえば何か」というテーマで調査を実施しました。次年度以降、学生たちはカルタ、食、織物、食べものの4チームに分かれて、フィールドに入り、成果報告やレポートを作成。提案発表は地元イベントや講

座の場をお借りし、年に数回実施しました。多くの市民の方に向けて提案発表することは、生の声や意見をフィードバックして頂く機会にもなっています。」
各グループは活動中、Facebook等も活用し、教員・学生・地元住民が意見を交換し合う。継続した活動により、織物グループと食グループからは具体的な成果が上がってきている。「織物グループは、伝統的な小千谷縮を題材にしました。後継者不足が問題になっていますが、とまつ衣裳店さんとTAIアップして、卒業式の衣装を作ることにし、若い人たちにも関心を持ってもらおうという内容です。また食グループは、小千谷の特産品カリフラワーに注目しました。農家さんと協力して親子の



小千谷市はカリフラワー生産量の県内トップを誇る。料理方法の新しい提案のほか、栽培体験などのイベントを通して農家と住民の交流を図る

Q.長尾先生の印象を教えてください。
私のように優しい先生。みんな大好き!
雰囲気や緩んだときに、ピリッと空気を締めてくれる
Q.長尾ゼミナールについて
このゼミナールに所属してたくさんの方の知識や経験を得た
このゼミナールにいて大学生活が満足したものとなる
メッチャ楽しい!

4 地域医療を支える多職種の医療人が 高度な技術・専門知識を身に付ける生涯学習の場

医歯学総合病院の取り組み

“新潟医療人育成センター”

1 新潟医療人育成センターの設置が必要な理由

新潟県は深刻な医師不足を抱えています。県民人口あたりの医師数は全国41番目(平成20年12月)で、また、離島や多くの中山間地域を抱える地理的条件から、医師の地域偏在が顕著となっていました。【写真1】

このような状況を含めた県内医療の諸課題を解決するため、新潟県は平成23年に「新潟県地域医療再生計画」を策定しました。このなかで、医療人材不足を解決するため、医療従事者のキャリア形成支援、魅力的な研修プログラムの提供、研修環境の充実・高度化を図ることを目的として、「新潟医療人育成センター」の設置が計画され、主に新潟県の出資によって平成26年5月に竣工、8月末にオー

プンいたしました。【写真1】
本センターは、地域の医療を支える医師・看護師ほか多職種の医療人の方々が、高度な医療技術・専門知識を身に付ける生涯学習の場としての役割が期待されています。

文化財である新潟大学医学部赤門の正面に位置する地上4階の建物に、260名収容のホール【写真2】、セミナー室、シミュレーション室、模擬手術室・ICU・病室、各種シミュレーターを整備しました。シミュレーショントレーニング・ハンズオンなどの新しい医学教育の手法を用いたカリキュラムによって新潟県の医療を支える方々のスキルアップを支援いたします。



【図1】新潟県地域医療再生計画(平成23年11月)より



【写真1】「赤門」の正面に設置された新潟医療人育成センター
【写真2】4階ホール(260名収容)

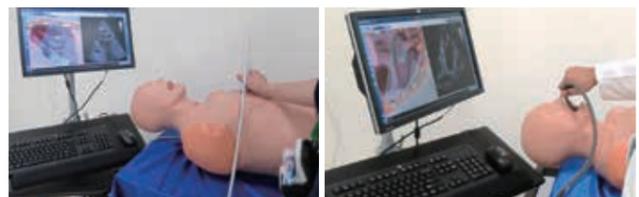
2 育成のための教育

センターには各種医療用のトレーニングシミュレーターを設置しています。これらを用いて様々なトレーニングプログラムを開発し、今後、県内の医療関係者にお使いいただく予定です。

シミュレーション室には、機器やベッド等をトレーニングの目的に応じてレイアウトして、模擬病室、模擬診察室、模擬ICUなどを設置できます。壁際には見学者用のスペースを設け、段上からトレーニングの様子を観察できます。またシミュレーション室にはカメラを設置し、実技の振り返りや、他の部屋への画像配信を行うことも可能です。



高機能患者シミュレーター(左:乳児、右:成人)
一般的症例の他、稀でかつ重篤な病態や、危機的状況に特化した症例(シナリオ)を再現することができ、緊急処置が求められる現場での実際の臨床訓練が可能



心臓・腹部超音波検査トレーニングシミュレーター
超音波画像診断、画像読影等の訓練が可能



血管内治療トレーニングシミュレーター
血管内治療、血管造影等の訓練が可能

3 育成された人材がどのように社会に役立つか

センターでのトレーニングによって、新潟県の医療を支える臨床研修医、専門医、指導医、看護師や他のメディカルスタッフのスキルアップを図り、医療の高度化に対応できる人材となっていくことを目指しています。また、新潟(大学)でこのようなシミュレーション教育を受けることが可能であるという点が、県

内で勤務・研修する医療関係者にとっても大きな魅力の一つとなればと願っています。
県内の医療関係者の方々には、このセンターを自らの「学びの場」として、また、インストラクターとして後輩の指導に、そして、「語らいの場」、「道場」として積極的に活用していただきたいと思っています。

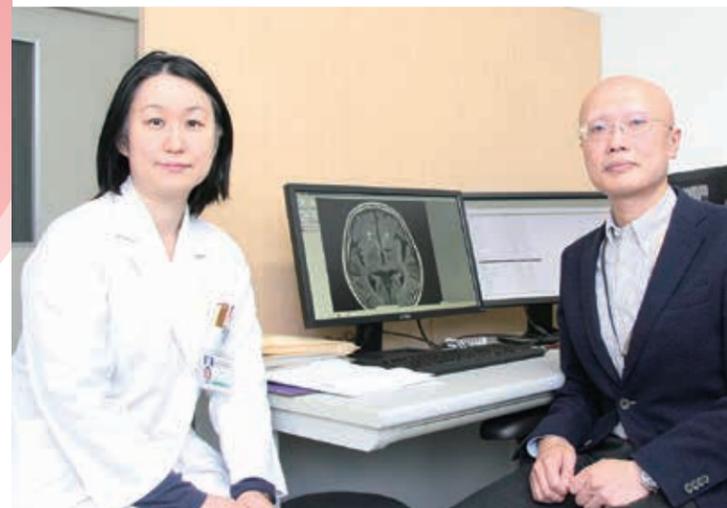


患者シミュレーターを使ってのトレーニングの様子

3 寝たきりゼロの高齢化社会を目指す 住民参加型の地域連携研究

医歯学系の取り組み

“佐渡プロジェクト”



若杉三奈子 特任助教

医歯学系附属 臓器連関研究センター特任助教。専門は腎臓内科学。

横関明男 特任准教授

医歯学系附属 臓器連関研究センター特任准教授。専門は神経内科学。

高齢化社会に向けて大学と地域医療の密接な関係を作り出すことはとても重要。新潟大学医歯学系分野では、地域と連携した住民参加型研究を県内3カ所で行っている。村上市・関川村・粟島浦村と連携する「鮭で元気プロジェクト」村上健康コホート調査、南魚沼市・魚沼市をフィールドにする「うおぬま地方の健康調査」、そして佐渡を対象フィールドにする「佐渡プロジェクト」だ。

佐渡プロジェクトのキャッチフレーズは「目指そう! 寝たきりゼロ」佐渡プロジェクト。将来「元気な高齢化社会を迎えるための手引き」を作る研究で、佐渡総合病院と新潟大学が協力して行っている。目的は高齢者疾患の治療と、その予後の改善。「高齢者疾患の特徴である障害のある臓器間のネットワークの病態機序を基礎および臨床面から解明を目指します。寝たきりの原因になる脳卒中中、

新潟大学と佐渡総合病院による
高齢者疾患についての研究
県内3地域で行われる
住民参加型研究
高齢者疾患の相互関連性を
病院との連携で明らかに

骨折、認知症や心臓病、糖尿病、メタボリックシンドローム、慢性腎臓病などは、相互的に関係していることを理解し、有効な対策を立てることが必要なのです」と若杉特任助教。
では、研究はどのように進められているのか?
「佐渡総合病院を受診する患者さんに同意を得て、アンケート記入、血液検査、尿検査、残歯数の計測、歩数計を使った計測などの協力をいただき、それらをデータベース化していきます。他大学でも地域と協力した住民参加型の研究は行っていますが、多くの場合、健康な方に参加していただくことがほとんど。しかし、佐渡プロジェクトは、実際に通院されている患者さんを対象としており、かつ千人単位のデータを収集している統合的医療データベース。これらの点で世界へも発信できる内容になっていると思います」と横関特任准教授。

佐渡プロジェクトのキャッチフレーズは「目指そう! 寝たきりゼロ」佐渡プロジェクト。将来「元気な高齢化社会を迎えるための手引き」を作る研究で、佐渡総合病院と新潟大学が協力して行っている。目的は高齢者疾患の治療と、その予後の改善。「高齢者疾患の特徴である障害のある臓器間のネットワークの病態機序を基礎および臨床面から解明を目指します。寝たきりの原因になる脳卒中中、



今年10月に佐渡総合病院で行われた「病院祭」。さまざまなイベントを通して健康への関心を高めた。写真は血圧測定ブースの様子

医療データを収集するだけでなく、高齢者疾患についての知識と理解を深めるためのパンフレットを病院に設置するなど、地域社会への還元が付帯するものも相互的な連携を図る。「病院と患者さんの理解のもとで行われるこの研究は、将来的には日本だけでなく世界の高齢者疾患の研究にいかすことができると思っています。佐渡から世界に向けて健康な高齢化社会のガイドラインを発信できるよう頑張ります」と若杉特任助教は意気込みを語ってくれた。

医療データを収集するだけでなく、高齢者疾患についての知識と理解を深めるためのパンフレットを病院に設置するなど、地域社会への還元が付帯するものも相互的な連携を図る。「病院と患者さんの理解のもとで行われるこの研究は、将来的には日本だけでなく世界の高齢者疾患の研究にいかすことができると思っています。佐渡から世界に向けて健康な高齢化社会のガイドラインを発信できるよう頑張ります」と若杉特任助教は意気込みを語ってくれた。



認知症の早期発見や予防についての講演会。佐渡総合病院と新潟大学が佐渡プロジェクトを通して互いに情報を提供し合っている

学生にとっては、部活に代表される課外活動も大切な青春の1ページですよ! このコーナーでは、そんな部活動を中心とした新大生の活躍をお届けします!!

CIRCLE PICK UP!

技術と演技の美しさを競う
競技ダンス部



夏と冬の全日本戦に向けて練習しています!

練習は真剣、部活動外の時間は和気あいあいと過ごす。フロアは演技者がスターになる場

演技はもちろん
人間力も磨かれる

「社交ダンスをスポーツとしてアレンジしたのが競技ダンス。男(リーダー)と女(パートナー)がペアになり、技術や演技の美しさを競い合います。新入生には初心者も多いですが、練習を重ねるにつれ演技がどんどん大きくなり、堂々とした雰囲気が出てくるようになります。競技会の運営や後輩の指導も自分たちで行っているため実践力が付きますし、他大学やOB・OGと接する機会も多く、マナーや社交性を備える場にもなっています」



主将 佐藤 恭一さん(理学部4年)

CIRCLE PICK UP!

大人数で音を奏でる喜び
管弦楽団



初めて楽器に触るといいう人も多いです

年に2回開かれる演奏会は集大成。ほかに小学校や児童センターでの訪問演奏も行う

大人数でひとつの曲を作り上げるのが魅力

「管弦楽は、管楽器や弦楽器、打楽器など様々な楽器で音を奏でるオーケストラです。新潟大学管弦楽団では、夏と冬に行う大きなコンサートに向けて毎日練習を重ねています。現在、管弦楽団のメンバーは約160人。実は、大学で初めて楽器に触ったという初心者も多いんです。限られた時間のなかで全員で合わせる時、いかに満足のいく演奏ができるかが課題ですね。そのため、前のコンサートよりいい演奏ができるように個人練習にも力を入れています」



部長 清水川 泉さん(理学部3年)

CAMPUS TOPICS!

探検部、オリエンテーリング部が
世界大会出場

第1回全日本レースラフティング選手権大会兼2014年度日本代表チーム選考会において、女子ジュニア(U-23)と男子ユース(U-19)で優勝し、10月にブラジルで行われた世界選手権に日本代表として出場しました。世界選手権で女子ユースはダウンリバー競技で優勝するなど総合3位の好成績を残しました。また、オリエンテーリング部の高橋祐貴さん(自然科学研究科1年)が日本代表選考レースで第3位となり、8月にチェコ共和国で開催された世界学生オリエンテーリング選手権大会に日本代表選手として出場しました。



オリエンテーリング部

9月20日~28日に
「うちのDEあい」が開催されました

教育学部芸術環境講座も参画する「うちのDEあい」は、新潟大学の地元である新潟市西区内野町を舞台に行われているアートプロジェクト。「人と人との出会い、繋がり」をテーマにした作品展示や参加型イベントを通して、学生と地域住民の方々が一緒に街と歴史を紹介して新たな内野町の魅力を発信するものです。各会場では、学生たちが会場を訪れた方々と笑顔で接し、充実した秋の一日を過ごしていました。



意欲ある学生が伸び伸びと勉学に勤しむ

授業紹介 — 教育の現場 —

専門的な知識や技術の修得と、均整の取れた知識の獲得は教育の重要な役割。約5,000科目の中から特色ある授業を紹介。

第10回 **歯学部**

よしば なご
吉羽永子 講師

Profile
専門は歯科保存治療(歯内療法・保存修復)。歯髓組織再生のメカニズムについて研究する。



保存修復学実習

実際の治療現場を再現する設備が充実
臨床に直結する最初の実習

保存修復学実習は3年生が対象。虫歯の除去の仕方、除去した後の修復(詰める)の方法を学ぶ。「臨床に直結する最初の実習であり、5年生後半の実際に患者様の治療を行う臨床本実習につながる重要な実習。虫歯治療の際は硬い歯を削りますが、削っている本当の相手は、歯の中にある歯髓と呼ばれる軟かい組織。この歯髓組織を守ることが、虫歯治療の原点です。治療によって環境を整えてあげれば、歯髓は歯を作ることができます。学生には、常にこの点を念頭に実習に取り組むように伝えています」。



STUDENTS VOICE

「臨床の現場で適切な治療を行うための最初の一步。実習室のおかげで、より現場に近い環境で学習をしています。白衣に袖を通し、緊張感を持って臨んでいます」(山本) 「1・2年次に講義室で身に付けた基礎知識を、実際に病院と同じ器具を使いながら身を持って学べる場です」(野村)



右 山本 悠さん(歯学部3年)
左 野村加奈実さん(歯学部3年)



よしはら あきひろ
葭原明弘 教授

Profile
専門は疫学および予防医学。現在は疾患発症のリスク要因について研究する。



歯科衛生学I

自ら課題を発見し、その解決に向け
自発的な生涯学習を行える人材を育成

「講義」を中心にした詰め込み型カリキュラムからの脱却が議論される昨今、歯学部口腔生命福祉学科では、いかなる状況においても自ら問題点を的確に抽出し、変化に適切に対処できる人材の育成に重点を置いている。「自ら課題を発見し、その解決に向けた自発的な生涯学習を行うことができる人材の育成」を達成するため、2年次からの専門教育にPBL(Problem Based Learning)を採用。歯科衛生学Iでは少人数(6~7人)のグループで作業を行う。「学生たちは、実際の患者さんの経過(シナリオ)をもとに事実を拾い出し、それに対する疑問を整理します。調査した結果をグループで共有、検討し、自分たちの考えが妥当であったか否か議論し、問題を解決します」と葭原教授。患者を想定したシナリオを使用するため、一つのシナリオには、「解剖学」「栄養学」「社会学」「予防学」など、さまざまな課題が含まれている。そのため統合された深い知識の理解や、問題分析・解決能力、対人関係能力などの力を養うことにも効果的だ。「自らが主体的に本プログラムに取り組むことで、さまざまな知識が統合され、実践に即した応用力の養成が可能となっています」。



STUDENTS VOICE

「シナリオに対して、仮説を立て、指導方針や課題について意見を交換し合う時間です。少人数のグループ学習なので、率直な意見の交換ができ、さまざまな視点が養えます。実際の患者さんを想定するため、臨床に進んだ際にも有効だと思います」



木村 萌花さん(歯学部2年)

恩師と語らう懐かしの時代
シリーズ・対談
恩師：石原清 名誉教授
元・医学部保健学科(旧医療技術短期大学部) 教授
教え子：西田香織さん 芳賀真美さん 伊藤純子さん
小貫郁子さん 鈴木翔子さん 小山哲秀さん

——今回は、このシリーズ初の東京出張取材であります。
小山 僕らも、まさか東京でこうして再会することになるとは思っていなかったなあ(笑)。
石原 23年間で延べ約1800人の教え子がいる中で、誰に参加してもらおうか考えていたとき、大学院の科目を受けに来た学生の中に飯田さん(旧姓)がいたことを思い出して、彼女に連絡して元学友会役員に声をかけてもらったところ、全員が在京とのこと。ならば東京で、当時の学友会長の小山くん共々はるばる新潟からやってきました。



伊藤 私も、久しぶりに先生から連絡が来て、しかもこういう対談のお話だったから、びっくりしましたよ(笑)。
小山 でも、ちょうどいいタイミングだったんですね。みんな、仕事とか、出産や子育てなどで忙しく、もし声をかけるタイミングがちょっとズレていたらこうしてうまくは集まらなかったのでは。
石原 そうだね。で、大学で経験したり勉強したことはちゃんと役立っているのかな？
西田 もちろんです！今、国立の東京病院で働いているんですが、看護の分野でも、診察とか診療の補助など患者さん



石原清 名誉教授

専門分野は「肝臓病学」。1986年より新潟大学医療技術短期大学部(現新潟大学医学部保健学科)にて教鞭をとる。医療技術短期大学部部長、医学部保健学科長、大学院保健学研究科長を歴任。現(一財)健康医学予防協会施設長。



小山哲秀さん



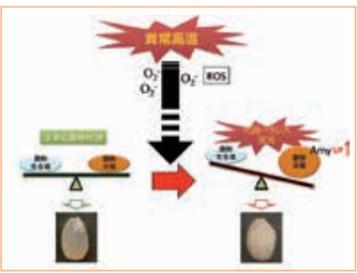
西田香織さん

新潟大学の特色ある
研究トピックを紹介

注目される研究報告



↑生物化学研究室では、「イネにおけるデンプン代謝制御」をおもな研究テーマとしている



↑左が通常の玄米。異常高温によりデンプンの生合成と分解の代謝バランスが崩れると白濁米(右)になってしまう

にさらされても、できあがるお米の品質は悪化しないんです。つまりMSD1の働きが強いイネが、高温に強いイネということになります。この品種を遺伝子組み換えでなく、培養変異という方法で作り出せるということが分かりました」。現在はセンター長を務める「新潟大学・刈羽村先端農業バイオ研究センター(KAAB)」で、その恵まれた研究環境を生かしながら、高温・高CO2環境に適応する次世代イネの開発研究に取り組んでいる。

新潟大学では、伝統的な学問分野を継承するとともに、専門分野を超えて連携し合う研究や、先端的な研究など、真理探究や社会の発展に貢献する研究を行っています。

研究課題 高温・高CO2環境に適応する次世代イネの開発研究

自然科学系(農学部) 三ツ井敏明 教授

米どころ新潟の未来を支える次世代イネの開発に取り組む



三ツ井敏明 教授
農学博士。研究分野は植物生化学・分子細胞生物学

近年、地球温暖化に伴うイネ登熟(発育・肥大)期の異常高温により、良質米の生産地域でも白未熟米粒(高温被害米)の発生が多発している。その原因が、タンパク質分解酵素“α-アミラーゼ”にあることを見出した三ツ井教授。「α-アミラーゼの働きが強まると、デンプン顆粒の形成異常が起こり、顆粒の間に空気の隙間ができて、白く濁ったようなお米になります。そこでα-アミラーゼの働きを弱めれば、高温下でも品質が悪化しないのではないかと考えたのです」。この研究は「高温登熟耐性品種の開発に期待」されるものとして、2012年の農林水産研究成果10大トピックに選定された。またこのα-アミラーゼの働きを抑制するものとして、“スーパーオキシジスムターゼ(MSD1)”という酵素に注目。「MSD1は酸化障害を防ぐ働きをする酵素なのですが、その働きを強めると、高温



↑高CO2&高温環境(下段)ではプログラムが乱れ、成長が早まる反面、最終的にできる米の細胞は小さくなってしまふ

研究課題 中国浙江省の人形芝居に見る口承文芸の研究

中国では願懸けや願ほどき、厄払いなどの際に上演されてきた人形芝居。かつてはどの地域でも行なわれていたが、娯楽の多様化の影響もあり、現在では限られた地区にのみ、その文化が残っている。そのひとつが中国浙江省の舟山群島。「舟山の人形芝居では指遣い人形を用います。神さまに奉納して演じられるもので、人形芝居という子供のもののようにですが、村の人、皆が楽しむ大切な娯楽でした。舟山では歴史物語を上演することが多く、どれも大作なので、一日数時間を何日もかけて上演します。著書でとりあげた「白兔記」は、

人文社会・教育学系(人文学部) 橋谷英子 教授



橋谷英子 教授
専門は中国文学。中国の口承文芸を研究テーマとする

浙江省舟山人形芝居をテキスト化し、その現状を解明

元末・明初(1300年代後半頃)から伝わる非常に古い話なのですが、それが人形芝居という形で現在まで繋がっていたということにおもしろさを感じて調査を始めました。「白兔記」は五代後漢の高祖・劉知遠とその妻子との生き別れと再会を描いた、初期の戯文の代表作。橋谷教授は、現地の人形座の協力のもと、約6時間の上演を3日間、計15時間にわたり全編録画。これをテキスト化し分析を進めるなかで、金(1100年代頃)時代の語り物「劉知遠諸宮調」にもつながる内容であることを明らかにした。「人形芝居は今と



↑調査をもとにまとめた著書『浙江省舟山人形芝居 候家一座と「李三娘(白兔記)」』
↑祓堂での願懸の様子。お供え物を前に人形芝居が上演される
↑舟山の候家一座の上演風景。一人の語り手が、さまざまな役を演じ分ける。後ろは伴奏者



芳賀真美さん (旧姓・池田)



伊藤純子さん (旧姓・飯田)



小貫郁子さん (旧姓・高橋)



鈴木翔子さん (旧姓・安宅)



対談場所：東京・椿山荘

Campus Information

地域に密着しながらさまざまな活動が続ける新潟大学。皆さんにお伝えしたいニュースはたくさんあります!

平成26年度 新潟大学・全学同窓会 交流会を開催しました



新潟大学・全学同窓会 交流会 記念講演会及び懇親会を、平成26年10月11日(土) ANAクラウンプラザホテル新潟において開催しました。多くの市民の参加もあり満員となった講演会では、医歯学総合病院フライトナースの宮澤舞子氏が「新潟大学ドクターヘリ」の活動を報告した後、本学卒業生の樋口 強氏(全日本社会人落語協会副会長/いのちの落語家・作家)

が「いのちの落語—笑いは最高の抗がん剤」と題し記念講演を行いました。参加者からは元気と勇気をもらえたとの声が多く寄せられました。

懇親会では、全学同窓会雪華支援事業に選ばれたクラブ・サークル等への目録贈呈、クラシックギター部による学生歌の演奏などが行われるなど、盛況のうちに閉会となりました。



「第1回ときめいとセミナー」を 開催しました

9月24日(水) 駅南キャンパスときめいとで、「第1回ときめいとセミナー」を開催しました。今回のテーマは「チンギス・ハン研究最前線」。第1部では、モンゴルの歴史や文化について人文学部 白石典之教授が講演し、第2部では展示コーナーに会場を移してモンゴルの民具や発掘資料などの説明がありました。参加者からは「モンゴルを身近に感じた」「モンゴルについてもっと知りたくなった」といった感想が多く寄せられました。

新潟大学基金のお知らせ ぜひご協力ください

学生の修学支援、国際交流活動等に活用しています。

※税法上の優遇が受けられます

● 基金ホームページ

<http://www.niigata-u.ac.jp/kikin/index.html>

新大サポーター連携推進室

電話:025-262-5651 (受付時間 平日9:00~17:00)

FAX:025-262-7796

E-mail:kikinjimu@adm.niigata-u.ac.jp



「新潟大学カード」入会受付中!

VISA付きの国際カード「新潟大学カード」。

卒業生と母校の絆を、いつもポケットに!

入会受付中

● 新潟大学カードに関するお問い合わせ先

新潟大学全学同窓会事務局

電話:025-262-7891

(受付時間 平日10:00~15:00)

E-mail:dosojimu@adm.niigata-u.ac.jp



新潟大学
季刊広報誌

六花

RIKKA No.10
2014.Autumn

■ 発行/平成26年11月 ■ 編集/新潟大学広報センター
(新潟市西区五十嵐2の町8050番地)

■ 電話/025-262-7000 ■ FAX/025-262-6539

Home Page <http://www.niigata-u.ac.jp/>

E-mail rikka@adm.niigata-u.ac.jp

Facebook <https://www.facebook.com/niigata.univ>

編集後記

今号の取材でも学生の熱心な姿に出会いました。授業では教員の指導のもと、その技術を身につけようと真剣に実習に取り組む姿、部活動では何度も繰り返し練習する姿がとても印象的でした。新潟大学には、ひたむきに頑張る学生がたくさんいます。頑張る新大生を今後も全力でサポートしていきます! (M)